2023 年 12 月 17 日　説教「傷んだ葦を折らず」

イザヤ書 42 章 1 ～4 節

イザヤ書の預言者イザヤは紀元前 720 頃、エルサレムに生まれ 20 歳頃に預言者しての召命受けました。ユダヤの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代にその働きをしました。アッシリヤの脅威がユダにも及んでいる時代でした。イザヤ書には、救い主の誕生を含めた、メシヤ預言が随所にありますが、今朝の聖書箇所もそのひとつであると言えます。

１．主が選ぶしもべ（1 節）

①しもべ（1）**「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ。」**

「しもべ」という言葉は、旧新約聖書において、次のような意味でつかわれています。宮に仕えるしもべ、という時は下働きをする者達です。神、キリスト、王のしもべの意味でも使われます。奴隷という意味で使われることもあります。クリスチャンのことをしもべと言われることもあります。ここで、「わたし」とあるのは主御自身ですから、主が支える「しもべ」というのは、なんと「救い主であるしもべ」、といった意味です。救い主がしもべであるとは理解しにくいのですが、そのかたに注目せよというのです。

②選んだ者（1）**「わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者」**

主御自身がお心のうちで喜んでおられるかた。喜ぶというのは、受け入れていることはもちろんのこと、そのことにおいて心が楽しくなることであり、希望をもたらすものでもあります。その存在は主が選んでくださった方であるというのです。それは 1 節で記された、主が支えてくださるしもべなのです。

③公義をもたらす（1）**「わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。」**

さて、主御自身が選ばれた「しもべ」に、主は聖霊を授けられるというのです。三位一体なる神は、地上に生まれてくださる救い主に、聖霊なる神をさずけてくださり、働かせてくださるということです。そして、「しもべ」である方はこの世の民に公義を与えてくださるのです。

２．ちまたに声を聞かせない（2 節）

①叫ばず（2）**「彼は叫ばず、声をあげず、」**

そのしもべなる方は、意外にも叫ばないし、声をあげないというのです。新改訳 2017 年度版では「声をあげず」は「言い争わず」とあり、不必要な主張はしないと言われるのです。一方、イザヤ書 40 章 3 節には「荒野に呼ばわる者の声がする。『主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。』とあり、叫ぶことを促されている人がいます。これは、ヨハネの福音書 1 章 23 節を見ると、バプテスマのヨハネのことが預言されているとわかります。叫びを求められている人が一方、叫ばずに、声をあげない「しもべ」という方について示されています。

②声を聞かせない（2）**「ちまたにその声を聞かせない。」**

「巷に声を響かせない」（新共同訳）はイメージが湧いてくる訳ですね。

いたずらに声をあげて、その声を響かせるようなことはしないというのです。人間の力よりも神の力に頼りきって、人間の心にそのメッセージを届かせることができるのです。

3. くすぶる燈心を消さず（3～4節）

①いたんだ葦（3）**「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、」**

葦とはエジプトやイスラエルの湿地帯に生える植物。丈が６メートルほにもなり、折れやすいのです。茎は杖に使われたり、ペンのようにして用いられることがあります。そんな弱い葦に、しもべである方は、傷んだ部分をいたわって、その葦を守るのです。なんとか生かそうとしてくださるのです。また、ここに出てくる燈心は、灯りの油の芯に使われる亜麻という植物から芯を作ります。ところが、この亜麻の燈心も弱いのです。しかし、ここでは、その燈心を用い生かそうとして、不純物を取り除いて長く持たせようとするというのです。

②まことをもって（3）**「まことをもって公義をもたらす。」**

また、そのしもべの真実をもって、公義がもたらすのです。1節においても聖霊を受けたしもべが「公義をもたらす」とあります。公義とはさばき、権利を表す法廷用語ですが、神こそが公義であり、貧しい者、弱い者などを弁護してくださいます。しもべである方は、この公義を自らのまことをもってあらわしてくださるのです。

③公義を打ち立てる（4）**「彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。島々も、そのおしえを待ち望む。」**

「選ばれたしもべ」は衰退しないのです。またくじけることがないのです。そして、この地に公義を確立させるのです。しもべなる方の公義は全世界に広がっていき、辺境の地である島々の民も、その教えをひたすらに待ち望んでいくというのです。

《結論》

今朝の聖書箇所における「しもべ」については、イザヤ書において次の箇所にあらわされています。今朝の箇所は第一の「しもべの歌」と呼ばれ、第二は49:1−6、第三は50:4−9、第四は52:13−53:12です。主はしもべを支え、しもべは主の心の喜びなのです。主は彼に霊を授け、主の使命を与えてこれを果させる。その使命とは、全世界に、公義をもたらすことです。それでは、そのしもべとは、誰のことでしょうか。もう気がついておられるように、救い主イエス・キリストのことです。実をいうと、このことは、新約聖書のなかに記されていました。マタイの福音書12章をごご覧ください。イエス・キリストが癒しなどのわざをなさった後に、ご自分のことを知らせないように戒められたことを記したマタイは、「これは、預言者イザヤを通して言われたとが成就するためであった。」（17節）と記し、イザヤ書42:1～4を引用します。ここで注目しておきたいことはイザヤ書において国々、島々と記されているところが「異邦人」と訳されていることです。諸国の民とも訳されているのですが、ユダヤ人向けに記されたマタイの福音書において、異邦人への配慮をするキリストの心が示されていることは、異邦人である私たちにはうれしいことです。

今朝私たちは、イザヤ書において、イエス・キリストが「しもべ」という言葉で預言されていることをみました。また、どのような方であるかをも見てきました。そのなかでも特に、「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない」というお言葉をもう少し深めていきたいと思います。

合理的な考えに立つならば、いたんだ葦は折ってしまった方が良いということになりましょう。またくすぶっている燈心であれば、消してしまえば良いともなりましょう。また、無慈悲な考えではこう思うでしょう。役に立たない者は切り捨ててしまえ、身体に障害のある者は外してしまえ、肉体や心に病のある者は治す必要がない、年をとっている者には用がない。・・・。

今日は福祉社会で、弱さを持つ人々への配慮はそれなりになされています。社会から、経済的援助、福祉援助は用いられています。しかし、人はそうした援助があったからといって、平安を得られるものではありません。それでは、「しもべ」であるかた、キリストは、この時代にあって、いかにかかわってくださるのでしょう。キリストはすべての人の心の奥底に関わってくださる方です。若く元気な方も、ひとたびその心の内をのぞくならば、問題や悩みがいっぱいあります。経済的に恵まれている人々であっても、その仕事、家族、人間関係などに立ち入れば、課題は次から次へとあります。さらに能力のある方は、それより優れた人々のことが目に映って満たされないこともありましょう。私たちは誰しも、折れやすく弱い存在です。

「私の人生はもう、枯れてしまいました。死に損ないの病気もしましたし、将来が見えてきません」。こんな独白をする方がいました。しもべである方、イエス・キリストは、弱い者を助け、強くし、衰えている者を助けて元気にしてくださるお方です。この時代にあっても、現実に困り果てている人はもちろんのこと、外見において何も問題がないと思われていても、実は弱り、落胆している人にも、しもべなる方は、手を差し伸べて下さる方です。そして、葦を折らないで放っておくのではなく、立たせてくださる方です。また、くすぶっている燈心を消さないで放っておくというのではなく、消えかけている燈心を新たにして、炎を燃やしてくださいます。

「主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は計りしれない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」（イザヤ書 40:28～31）。傷んだ葦を折らず、くすんだ燈心を消さない主はこのように、励ましてくださっているのです。この方に、心のうちにあるすべてを伝えて、力をいただいていきましょう。

コーニング　しもべが葦で字を書き、くすぶる燈心の下で筆記を進めている熱心さを表していると説明。いずれにせよ、謙遜で目立たない、しかし不屈の働きにより、全地に公義が打ち立てられ、全地の人々はその教えを待ち望むのである。（2:23）

鈴木この 1−4 を第一の「しもべの歌」と呼び（第二は 49:1−6、第三は 50:4−9、第四は 52:13−53:12）、関連性、内容、著者問題などを「しもべの歌」というまとまりの中で論じることが盛んであるが、それについてここでは取り上げない。ただ、その理解がしばしば恣意的であることは注意を要する。 主のしもべについては、41:8 以下に語られているが、ここにはそれをさらに繰り広げている（1−7）。ここに述べられている「しもべ像」はまことに主のしもべにふさわしい。主はしもべを支え、しもべは主の心の喜びである。主は彼に霊を授け、主の使命を与えてこれを果させる。その使命は、神の民だけでなく、「国々」に「地に」「島々に」うtまり全世界に、公義をもたらす。神の義の御性質に基づいた公正な判断と実行が、このしもべによって正当に行われ確立される。しかも「主のしもべ」がそれを行うに当たって用いる手段は威圧的にではなく、柔和に、どのような反対に出会っても決してくじけないで、真実をもって確実に達成する。これは主が立てた計画と使命であるので、しもべはこれを果たさなければならない。ところで、イスラエルがしもべと呼ばれているのだが（41:8）、果たして彼はこの重要な使命をこのような方法で実現できるだろうか。従って、主のしもべも主が予告された通りにこのわざを行わなければならない。

リビングバイブル わたしの支持するしもべ、わたしの喜びとする選ばれた者に目を留めよ。わたしは彼に、わたしの霊を与えた。彼は世界の国々に正義を示す。彼は物静かで、路上で大声を出したり、言い争ったりしない。いたんだ葦を折らず、今にも消えそうな火でも消さない。しょんぼりしている人を元気づけ、もうだめだとあきらめる者を励ます。こうして、痛めつけられた者たちに完全な正義があたえられるのを見届ける。真実と正義が世界中に行きわたり、海の向こうの遠い国々の国民が彼を信頼するようになるまで、手を休めない。

葦という植物は、エジプトやイスラエルの低湿地に生える植物。日本では、ヨシズと呼ばれる夏の日よけに使われる植物でおなじみ。茎が杖の素材になるが、折れやすい。折れやすい葦の杖を折れないように、やさしく使うという意味。
・灯芯とは、当時、灯火の油の芯に使われる亜麻という植物の繊維で、不純物が多い灯芯はすぐ捨てられてしまいがちだが、不純物を取り除いて長く持たせるという意味が込められている。
・このように、神に反抗し、裁きとして、50 年を超えるバビロン捕囚で傷みつけられたユダの民にたして、救い主は、やさしく労わり、新しい命を与えて下さるという
・傷んだ葦、くすぶる燈心、最近はやりの言葉で言うと「フレール」、年を取るにつれて老化が進むように、脆い、壊れやすい状態をさす。精神的にも肉体的にもまともに生きていけない人たちに対し、イエス様は、憐みの気持ちをもって労わられた。現代でも、貧しい地域や難民の子ども達もこれに当てはまる。ワールドビジョンでも、キリストの愛を実践すべく、fragile（脆い）地域, vulnerable（最も弱い）子どもたちに寄り添って支援の手を差し伸べている。
・私たち自身も弱い、ちょっとしたことで折れやすい、傷つきやすい存在である。私自身、年を取ってくると体があちこちガタが来るし、物忘れが多くなって（先日もATM でかばんを忘れた!）、フレール になっているのを実感する。年に関係なく、将来の希望を失いかけている人たちをイエス様は優しさと憐みの心をもって受け入れ、養ってくださる。

今日は、聖書に出てくる植物の葦のお話です。葦というのは日本にも川などに群生していますが、聖書の土地に生えていたものは背丈が六メートルにも達する葦で、折れやすいのだそうです。ですから籠などを編むには葦は適していなく、パピルスなどの方が重宝されたようです。聖書にはこんな表現が出てきます。「折れかけの葦の杖を頼みにしているが、それは寄りかかる者の手を刺し貫くだけ。」（列王記下 18 章 21 節）すぐに折れてしまうので頼りにならないと。そして、今日の箇所の「彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。」とは、神様から見て葦のようなそんな私たちでも、それを捨ててしまうことなく、いとおしみ大切にして下さると言います。傷ついた私たちを見捨てることなくいたわって下さると言うのです。

また、灯心がくすぶっているのは、油が切れかかっていて、ランプの炎が風前の灯火のようになっていること。つまり生きる力が絶え入りそうになっていることです。しかし神様は、そういう命に目を留められ、あきらめず

に再び油を注いで、新しい力を与えて下さる。それが復活への道であるわけです。実に人々の生活の中にあるもの、またそこに息づいている言葉を使っていると言ってもよいかと思います。